

熱戦のエピローグ @清浦中戦

オオスカシバ

ブルーギル、それは池などに住み、在来種を食い荒らす侵略的外来生物である。しかし、人間の、ごく普通の公立中学校の卓球部にも、二匹のブルーギルがいた。

ごく普通の中学二年生、佐原涼花と春山桃花、鈴蔵中女子卓球部の二強であり、小学校時代はそれぞれ別の陸上クラブにいたという共通点を持つ。そこで失敗してしまったために、比較的楽な卓球部に逃げ込んできた弱者のはずであった。しかし、わずかな体力的アドバンテージを初期資源に、一年生のうちから先輩の団体戦のポジションを強奪し、二人で次期部長と副部長の座を獲得した。おまけに学力とやら走力とやらもチームでずば抜けていて、無駄に目立ってしまうのだから、それはもう完璧な外来種ブルーギルであった。悪のモンスター魚だ！

……と思ったかもしれないが、実は二人はいい意味でも侵略的だった。二匹のブルーギルの生態に密着してみよう。

「明日は清浦中と練習試合、八時十五分に現地集合！解散は、えーと……時間変更で十二時半くらいになると

思われます」

顧問がスケジュールの確認をする最中、涼花と桃花はしっかりと時間をメモしていた。他の部員たちは突っ立って聞いているだけだった。

「ちよつと、みんな大丈夫かい？二人はちゃんとメモしているみたいだけど、他の人たちは平気なのかい？」
意欲があるのは専ら二人だけである。クラブチームのガチな雰囲気をかじってきた彼女たちにとっては、失望しかできない存在だった。だから二人は、他の部員とは必要最低限のやり取りしかせず、常に二人だけで行動するようにになっていた。

その日の夜の春山家でのこと。

「桃花、綾音ちゃんからメール来てるよ。明日のプランじゃない？」

桃花の姉、月乃が自分のスマホを彼女に手渡した。高校からスマホ所持の家庭なので今は姉とシェアしている。とはいえなぜ桃花の友人のアカウントまで管理しているのか？まあ、それもぼちぼち分かることになる。

「了解！すぐ返信しちゃうね」

「焦らなくていいよ。これからレポート書くから集中したいし、桃花も勉強ばっかで疲れてるだろうから、ゲームでもしてリラククスしな。お母さんに見つからないよ

うにね」

「ありがとう！ レポート頑張っつね」

姉が部屋から出ていくのを見送ると、桃花は腹ばいにベットの飛び込んだ。そしてチャットのルームを開く。

(明日の予定 @清浦中)

依頼主 高部芽那 高部愛那

依頼内容 須室海岸でメノウを二十個探す

持ち物

汚れてもいい服装

日差しが強いので帽子

水分

ビニール袋があると便利かも！

日焼け止め必須！

報酬 高部荘でのおもてなしディナー

今年度初のブルーギルズの活動！ 頑張っついでいこう！

浜塚市の卓球部員のお悩みじゃんじゃん解決だよ！

以上、風島中支部こと 袴塚綾音でした

そう、彼女たちは移動お悩み解決隊、ブルーギルズ。他校をハッピーで侵略することが目的だ。たまたま青いユニフォームの学校なのでブルーギルズという名前にな

った。メインメンバーは創設者の涼花と桃花、綾音は二人と塾で接点があり、人脈を活かして宣伝や情報提供を行っている。そして月乃、教育学部の学生で運転免許を持っているため、ドライバを担っている。綾音も風島中の卓球部であり、月乃も中学時代は卓球部だったので、二人のいい助っ人になっている。

桃花はすぐに涼花宅に電話を掛けた。涼花も同じ理由でスマホを持っていない。

「もしもし、佐原さんのお宅ですか？ あつ、涼花？ 明日の持ち物はくで……しかも依頼主、あの高部荘の双子

だつてよ！ 噂は本当だつたんだね。なんか難しそうな

依頼だけど、クリアしてディナー食べようね！」

「私も今からめっちゃワクワクしてるよ！ 綾音いわく

オレンジの石らしいけど見つけられるかな……」

涼花も難しい依頼だと感じている様子だつた。

「それにしても、そんなに集めて何に使うんだろうね？」

「確かに！ 綾音に聞いてもらえばよかった」

桃花はしまった、と思った。

そんなこんなで当日を迎えた。

「じゃ、また後で。十二時半だよね」

月乃が手を振った。二人は彼女の送迎で一番乗りに着いた。部内では当たり前前で、顧問がたびたび「何

時に出発したのよ？」と聞いてくる。

「潮風が最高！ 旅行してる気分」

涼花が目を閉じて風を体いっぱいを受けている。四月も終わりが近づき、初夏に移ろうとしている。

浜塚でもまだまだ知らない場所があり、練習試合を通してその地を開拓していく。この感覚がPS3に似ているようでワクワクしてしまう。だからその学校の選手とお悩み解決というきっかけで交流して知り尽くしたい！という希望が、ブルーギルズ誕生の根源となった。

「なんか二人だけの時間って感じがするね」

桃花が言った。それから二人は水筒のお茶を飲んで試合のエネルギーを補給し、軽くストレッチを済ませた。他の部員がいない時は、各々陸上クラブで使われていたものをする。裏切者みたいでちよつと罪悪感を覚える。

「この時期ってなんか大きい大会あったよね？」

桃花が聞いた。

「小学総体だね」

涼花がすぐに答えた。

「すごい！ よく覚えてるね」

「珍しくいいタイムだったから印象に残ってるんだと思う。六年の時だっけか、ど底辺だったからチームのユニフォームもらえなくて小学校の体育着だったな。だからこそいいタイムが出せてうれしかった」

「そっちの方がかつこいいもんね！ でも何なん、ユニ

フォームくれないって？ サラブレッズってブラックなん？」

サラブレッズは涼花の陸上クラブだ。

「表裏がある感じかな。監督もメディアの取材ではない人ぶって評価が高いけど、子供に厳しすぎて精神的体罰に近い！ とか批判する人もいるね。それに最頂とか普通にあるし。監督は『中学行ったらこんなの当たり前だ』とか言ってたけど、厳しい方のうちの顧問も可愛いくらいだよ」

「それは酷いね。頭の中いつの時代の人間なんだろう？」

「浜かぜは割とホワイトだったんだよね？」

涼花も聞いた。

「まあ、一応浜塚市陸協だからね。そんなリーダー的組織がブラックになったらおしまいだもん。でも厳しくない代わりに、落ちこぼれてもほったらかしだし、それはそれで寂しかったかな」

「でもここ来てよかったよね。団体戦じゃ特に重宝されるし、基礎練リレーのぐつばガチャじやSSS扱いだもんね。贅沢なものだよ」

「うれしいけど人数調整で二周走らされた時地獄だよ。あれじゃ他の人の練習にならないよね。ていうか余裕で二周走れる実力あったら陸上部選んでるし。私たちのことなんだと思ってるのさ！」

桃花が言った。

遠くに他の部員も見え出したので、二人は会話を打ち切った。

ブルーギルズは依頼を受けるにあたってある条件を設けている。それは「いい試合をしてくれること」。試合が名刺交換の代わりになる。しかし、別に依頼主は勝つても負けても構わない、ほぼいらないルールではある。

団体戦が終わると、自由に個人戦が申し込める。でも、他の人に取られていつになっても試合ができない、ということもよくあるので、ブルーギルズは真っ先に依頼人のもとへ向かう。

「桃花、せっかくだしダブルスにしない？」

ダブルスが嫌いな涼花が珍しく提案した。

「どうしたん。大雨でも降るん？ 海が荒れたらメノウ探せないじゃん」

「高部ペアとはやってみたかったんだよね。双子の連係プレーとか気にならない？」

「確かにレアかも。やってみるか」

二人は高部姉妹を探した。綾音の情報によると、目印は特になく、「見れば分かる」とのことだった。やはり簡単に見つけることができた。ただ立っているだけでも、依頼主が一人の時よりずっと目立つ。双子の存在感は違う。

「すみません。高部さんですか？」

桃花が先陣を切って話しかけた。

「はい。もしかしてブルーギルズですか？」

姉の芽菜の方が聞いた。

「そうです。依頼ありがとうございます」

「このまま試合することでいいんですよね？ 組み合わせ決めちゃいましょうか？」

「あ、せっかくだしダブルスにしませんか？」

涼花が提案を持ち掛けた。

「一戦目からですか？」

芽菜は少し困ったような顔をした。申し込み試合は基本シングルスなので驚いたのだろう。

「やっぱりむちゃぶりだったかな？」

涼花は桃花の耳元にささやいた。

「ねえ芽菜、私たちとダブルスしたいって言ってるんだよ！ こんな子たち初めてじゃん！ 嬉しいじゃん！ やろうよー」

妹の愛那が肩を引っ張ってせがんだ。

「引退したらもうできなくなるんだよ」

二人は三年生で引退も近い。だから愛那も必死なのだ。

「愛那が言うなら……はい！ よろしくお願います！」

四人は空いている台に入った。軽くラリーで練習をした後、じゃんけんでサーブ権を決める。

二人にはここ一年の経験で手に入れたじゃんけんのノウハウがあった。

（ふくよかな人はグーを出しがち。スタイルがいい人はチヨキを出しがち。パーはまずいない）

と、まあ世に出したら人権団体から訴えられそうな最低な理論である。

「桃花お願い」

桃花は一時期無駄にじゃんけんに強かったことがあり、勝手に強いというイメージを植え付けられた被害者なのだ。

「プレッシャーかけないですよ」

しぶしぶ拳を上げた。

「最初はグー……」

芽菜は細身だったので桃花はグーを出した……のだったが、芽菜はレアなパーを出していた。そもそも非科学的なデータで勝てるわけがない。

トップバッターの芽菜が強力な回転のサーブを繰り出した。涼花は少し苦戦したもの、なんとかネットを超えてくれた。続いて愛那が返しに来る。涼花の球はネットの際に落ち、軌道を追うのは困難かと思われた。先取点を取れる！と予測した。

「!!!」

愛那は上半身を台にたたきつけるように伸ばし、捨て身のスマッシュをかましてきた。二人が呆然とする中、

芽菜とハイタッチをした。なんとも見事な三球目攻撃、双子の連係プレーだった。

「よっしゃ！ グランパススマッシュが決まった！」

愛那が飛び跳ねながらはしゃいだ。

「愛那さんのネーミングセンスって……」

桃花が涼花の方を向いて呟いた。

「あつ！もしかして、シャツが波打ち際のアシカを襲う時の！」

涼花が聞いた。

「そうです。佐原さん分かっていますね」

「だったらシャツから逃げ切って見せますよ！」

涼花が勝手に喧嘩を売ってしまった。

「最高！ やっぱダブルスやってよかった」

芽菜もすっかり満足していた。

桃花もこの熱気に置いて行かれるまいと構えなおした。

「くそー。獲物を逃したか……」

高部姉妹は肩で息をしていた。涼花と桃花も四月なのに汗だくだった。でも息は切れていなかった。クラブではへなちよこの持久力で底辺だったのに、卓球になったとたん無尽蔵のスタミナになる。こうしてフルセットまで持ち込んだ末に、なんとか白星をつかんだ。こんな時はいつも、陸上由来の体力のおかげで勝てたと都合よ

く解釈する二人である。

「随分盛り上がってるなと思ったら、ダブルスをやったのか。おや？ 二人とも『あいめなペア』に勝ったのかい？ 鈴藏中と試合をしてよかったよ。何しろ二人がどうしても鈴中に申し込んで欲しいって言ったもんだからね」

清浦中の顧問が交ってきた。どうやらさっきの試合にくぎ付けになっていたらしい。

「二人とも、へとへとじゃないか！ もっと頑張らないとな」

姉妹は顔を見合せて笑った。

実はブルーギルズは練習試合で当たった学校の依頼しか受け付けていない。だから綾音の宣伝を見たものは、なんとかして鈴藏中と試合をするよう顧問に交渉する。大体そういう申し出ができるのはそれなりに意欲や実力がある人ばかり。だから二人にとってお悩み解決は卓球面でもいい刺激になっている。

四人は各々シングルの相手を探すため、ここで解散することにした。

「それじゃあまた後で、よろしくお願ひします」

姉妹が息ぴったりに言った。

十二時半に解散と言っていたが、相手が片づけを手伝

わなくていいと気を遣ってくれたので、十五分早く終わってしまった。強制的に帰らされてしまったので、月乃が迎えに来ているのか心配になった。

「お姉ちゃん怒るかな？」

桃花が言った。

「最悪どこかに隠れて時間稼げばいいじゃん」

「上手く騙せればいいけど」

ところが月乃はもう来ていた。

「お姉ちゃん、早くない？」

「片付け免除って私もよくあったから、実はいつも早めに来てたんだ。それより二人とも、差し入れの弁当持ってきたから海岸で食べて待とうか」

「やったー」

ブルーギルズの至福のひと時。「いい試合」をして空腹になったところに、昼食で依頼解決に向けた英気を養う。

「報酬があれだから、今回は軽めの弁当になっちゃってごめんね。次回はどこか食べに行こうか」

「報酬にたどり着けるかも分からないけどね」

桃花は苦笑いした。

海岸の駐車場で着替えをすまし、砂浜へ向かった。石が多い海岸だが、駐車場の近くは砂が多くてレジャーシートが敷けた。

三人で月乃特製サンドイッチを頬張った。具はありきたりなものだったが、フルーツサンドは熱量が違った。とにかく断面が芸術作品のようで、涼花はこんないい姉がいる桃花をうらやましく思った。

レジャーシートをたたんでいる途中で、高部荘から電話があった。今から向かうとのことだったので、急いで荷物を積んだ。

「じゃあ、あまり海に近づきすぎないようにね」

と言つて月乃は離脱した。ここからメインメンバーの仕事が始まる。

二人は割とすぐにやつてきた。ユニフォーム姿しか知らない選手の私服姿を見るのもまた新鮮だった。

二人が石の見つかりやすいポイントまで案内してくれた。頑丈な運動靴を履いてきたものの、足場になれない二人は、時々石の山に足を取られそうになった。試合の時とは正反対で、姉妹は軽々と歩いていた。

「そういえば、そんなに集めてどうするんですか？」

涼花が聞いた。

「やつぱり不思議に思っちゃいますよね。あ、安心してください。金儲けとかじゃないですから」

芽菜が言った。

「この海岸つて観光地として有名でしょう？ だからゴールデンウイークにはうちの宿にも家族連れが沢山来るんです。ここでメノウが取れることつて意外と知られて

て、みんな探しに来るんです。大人があまりにも騒ぐもんだから、メノウの価値なんて分からない子供も、『きれいなオレンジの石が欲しい！』つて期待しちゃうんです。でもこれ、だいぶ時間を割かないと見つからないことも多くて、子供さん泣いちゃうんですよね。見つからないと。だからそういう家族のために、この時期になるとメノウをストックしておいてプレゼントするんです」

「だったら、もっと早く用意できなかったんですか？」

桃花が聞いた。毎年恒例なら、わざわざブルーギルズに頼まなくていいんじゃないかと涼花も感じていた。

「それが一年中見つかるつてわけでもないんですよ。今の時期海が荒れやすいから、特別にメノウが打ち上げられるんです。そしてゴールデンウイークに乱獲されるからまた減るつていうサイクルなんですわね。」

愛那が解説してくれた。たった数日でメノウが消えてしまうとは、どんな観光客の密集具合なのだろうかと二人は思った。実は二人ともまだここを訪れたことがなかった。

「いつもは兄と祖父が探してくれてたんですけど、兄は進学で引っ越してしまつたし、祖父は腰をやっちゃつて入院しているんです。そして私たちも受験生、今年ばかりハードなんですよ」

芽菜は低いトーンで言った。家の手伝いに練習試合でだいぶ疲れていた。試合の時にはあんなに明るくても、

依頼主として向き合い、初めて知れる裏事情がある。

「任せて下さい。四人で探せば二十個集められますよ」

「一日で片付けちゃいましょう！」

二人が鼓舞した。

「ありがとうございます！ 私たちも力を貸します！」

高部姉妹も気力を取り戻して答えた。

姉妹曰く、なぜかメノウは小さいものばかりで、探すのに神経を使うとのことだった。涼花と桃花はゴツい石の間に目を光らせながらゆつくりと歩いて行った。灰色の、絵にかいたような丸い石の中に、水色、白、赤紫……個性豊かな色彩が見えた。

「メノウじゃなさそうだけど、この石きれい」

桃花が言った。手のひらほどの大きさで、白い卵型の石を手にしてた。こんな調子で夕暮れまでに終わるのかと涼花は心配になった。

「その白いやつ意外とよく出てくるんですよ、きれいですよね。せっかくビニール袋持ってきたんですし、気に入った石があったらお土産代わりにどうぞ！ メノウだけ入れるにはもったいないですから」

芽菜は少しうれしそうに語った。

「私も石が好きです。小さいころ愛那と一緒に日が暮れるまでお宝を探していました」

「お母さんによく怒られたよね」

愛那も加わり姉妹エピソードを聞かせてくれた。

「だから子供たちのために、どうしてもメノウを集めちゃうのかもしれないですね」

桃花はさつき拾った石を陽にかざした。よく観察すると、黄色や灰色も混ざっていて、自然の産物であることを実感させた。

「すみません。こんな熱く語っちゃって。私たちおかしな人たちですよ」

二人は申し訳なさそうな顔をした。

「そんなことないです。むしろ二人の意外なエピソードが聞けて嬉しかったです。ブルーギルズで依頼人と向き合っている時のいちばんの楽しみなので」

涼花がフオーロした。

「それはよかったです。確かにいい勝負をした相手って、親しみ感じちゃって、もっと知りたくなる時ってありますよね。でも試合が終われば所詮ただの他人。それでも人助けしながら実現させちゃうあなたたちってすごいですね」

二人はなんだか照れ臭かった。そして、まだ一つも見つけられていないことを思い出した。

「そろそろ探しますか」

四人は散らばった。

「あっ！」

桃花が石の隙間に指を二本突っ込み、何かを取り出した。オレンジの小石だった。

「愛那さん、これ……」

「やりました！ メノウですよ」

先を越された！ と涼花は思った。缶詰のミカンに似た色合いを必死に探した。

「私たちも負けてられないね！」

姉妹も気合を入れた。一人が見つけたことで、みんなの心に火が付いた。

それからは意外と早いペースで見つけ出すことができた。涼花が一番大きいものを見つけて、桃花が悔しがった。姉妹もその大物に目を丸くしていた。

気が付いた時には、四人とも袋の中がオレンジ色に染まっていた。数えれば二十四個もあった。

「よかったら余分な四つはお二人と、あとお姉さんと綾音さんのお土産にしてください」

愛那が言った。

「好きなを選んでくれたら、宿に戻った後キーホルダーにします。ぜひお守り代わりに」

ダイナーにありつけず悔しそうにしていた月乃と、綾音の顔が浮かんだ。メノウの輝きを二人に見せたら、少しは喜ぶだろうと思った。

「はい、お願いします」
二人は快く頼んだ。

「涼花はいい石見つけたの？」

高部荘への道中、桃花が聞いた。

「うん。ちよっと地味かもしれないけど」

涼花が取り出したのは、ちようど手を隠してしまうくらい、ずっしりとした灰色の石だった。黒い斑点がちらばめられていて、素朴な美を放っていた。

「このくらいのサイズだとインテリアにもなりそうですね」

芽菜がアドバイスした。

「なんかそのまま涼花を石にしたみたいだね」

桃花が意味深な発言をした。

「落ち着きがあって、でしゃばらない感じ、なんか似てるな。かつこ試合の時を除く」

「私の石……宝物にするよ」

ブルーギルズの思い出の品がまた一つ増えた。

「まだ夕飯まで時間があるので、部屋でくつろいでいてください」

宿に入ると、二人の口調が女将らしさを帯び始めた。

試合の時の高揚とは裏腹に気品を帯びている。

「えっ？ いいんですか？ お客さんいません？」

さすがに悪いと思った。

「嵐の前の静けさよ」

姉妹の母である女将が言った。背後のカレンダーが目に入る。あと数日でゴールデンウィークだった。

有名な高部荘に、ただで入れたことに感動した。案内された部屋は、なんとスイートルーム的な場所、さつき歩いた道と海岸が望めるようだった。高台にあるのでとにかく景色がいい。

まだ三時半で、スマホもない二人が時間をつぶすには退屈すぎた。一画足りない川の字になって昼寝をすることにした。

部屋の心地が良すぎて、かなり長い間眠ってしまった。

桃花は先に目が覚めた。しかし、涼花がまだ眠っているのを確認すると、再び目を閉じた。昼のぬくもりを感じた。たまには床で寝るのも悪くないと思った。

誰かが階段を上ってくるのが聞こえた。そして部屋をノックした。

「はい」

慌てて髪を梳かし、仕方なく桃花が応じた。着物に着替えた愛那だった。

「もうすぐお食事の用意が……ひえっ！」

愛那が桃花の背後を指さして固まった。桃花はそれでも冷静に振り返った。

「ああ、涼花ですか？ 心臓に悪い寝相ですよ。生きてますよ」

「はあ、随分と安らかに眠っていらつしやいますね。ごめんさい、布団を敷いておけばよかったですね」

涼花は仰向けになって、胸の上で手を組んで眠るのがルーティーンらしい。タオルで顔を隠しているので余計にリアルだ。

「試合帰りのバスで初めて見た時はこっちの心臓が止まるかと思いましたが。エナメルに突っ伏すのだと眠れないから！ って背もたれに寄りかかったまま寝るんです。涼花は試合で熱くなりすぎるから、体力使い果たして絶命したんじゃないかと思っちゃいます」

「お二人もなかなか面白い一面持ってるんですね」

涼花を起こさないように静かに笑った。

「あ、でも起こした方がいいですよ」

食事まであと二十分しかなかった。

「こちよこちよしたら起きますかね？」

愛那がいたずらっ子のような笑みを浮かべて聞いた。

芽菜とは違ってグイグイ来るタイプだ。

「どうぞ好き勝手やっちゃってください」

愛那は涼花の真横に座り込んだ。そして、細い指で右

わき腹を容赦なく襲った。

「ギヤーツ」

という悲鳴とともに涼花がビンタを繰り返した。愛那が顔を近づけていたため、頬に直撃してしまった。

「痛っ！」

かなり効いたようだった。

「うーん、危なかった……って、この女誰？」

涼花が寝ぼけたまま桃花に聞いた。寝起きで口が悪くなる。

「女将になった愛那さん」

「えっ、えーっ！ ごめんなさい」

「平気です。調子に乗りすぎました」

「愛那さんとシングルスしてる夢を見てたんですけど、ちようどスマッシュ打とうとしてた時にハチに襲われて

……」

「ごめんなさい、私がかくすぐって起こしました」

土下座して謝罪した。桃花が隣で爆笑していた。修学旅行のような空気になっていた。

「失礼します」

芽菜もやってきた。手には小袋を持っていた。

「これ、例のキーホルダーです。エナメルにでもつけてもらえると嬉しいですよ」

丁寧にラッピングされたビニールの中にメノウが光っていた。金属製の螺旋の型に埋め込まれていた。

「ありがとうございます！」

二人はお礼を言った。

「では、そろそろお食事の用意を……」

「やった、楽しみ！」

涼花は完全に目を覚ました。

二人は旬の魚や自家製の野菜の味を楽しんだ。姉妹の分も用意されていて、クラスメートとの給食のように仲良く過ごした。誰さんはかわいいと思うとか、誰ちゃんはこの間こんなドジをしでかしたなど、お互いのチームメイトの噂話で盛り上がった。敬語だった会話も、ため口の数が増えていった。本来なら先輩と後輩の関係であることなど、誰も覚えていなかった。

月乃が迎えに来た頃には九時近くになっていた。バイト上がりだったのか、スーツを着ていた。

「超楽しかった！」

桃花は昼間と変わらないテンションで今日の出来事を語った。ほとんど宿に着いてからの話だったので、

「二人とも夕飯食べに行ったのかよ」

と、月乃は呆れてしまった。

「でもいいなあ。私なんかチームで孤立してたし、他校

にでもつながりを求めるべきだった」

「お姉ちゃんなんか言った？」

「いや、何でもないよ。同じチームでわちゃわちゃするだけが部活じゃなくて、色んな形の楽しみ方があるんだなって思ってる」

「月乃さんも時間が合ったら一緒に依頼解決しましうう！ チームメイトなんですから」

涼花が言った。

「ありがとう」

バックミラーにはぼんやりと彼女の笑顔が見えた。

「そろそろ現実に戻るぞ、ブルーギルズ！ 明日宿題全部やらなきゃね」

「やばい！ 宿題もあるけど、数学の小テストの用意も！ あーやだ数学大っ嫌い」

桃花が頭を抱えた。成績総合トップテン入りしている人とは思えない毛嫌いつぶりである。

「成績下がったらこんなことしてる余裕なくなっちゃうでしょ？ 学生は勉強第一なんだから頑張る！」

「はい！ 頑張ります」

涼花は絶望している桃花をよそに気を引き締めた。

「ねえ、お姉ちゃん、もしこれが顧問にばれたら怒られるかな？」

「えー。なんで私に聞くの？」

「お姉ちゃん、先生になるんですよ？」

「まあ、そうだね。いい質問ありがとう。私だったら怒ったりしないよ。むしろ応援してあげると思う。よく知らない相手と積極的に関わって、レスキューまでしちゃうんだから。表彰ものだよ。こんなに積極性のある子に育ったんだなって感動しちゃう。いずれは引退して、高校も離れ離れになっちゃうかもしれないけど、二人にも、綾音ちゃんにも、ずっと心はブルーギルズのままでもいいな。この経験はどこに行っても絶対に武器になってくれると思うから」

二人は顔を見合わせて頷き、そしてしっかりと握手をした。次はどんな選手がブルーギルズを待っているのだろうか？